

「人間の持つ全遺伝子情報 (ヒトゲノム) の解読やバイオ技術の進歩によって、がんの分子標的治療薬が登場した」という書き出しの記事が中日新聞に載った (5月14日)。「従来の抗がん剤は、がん細胞と同時に、正常細胞にも作用し、有効性と副作用は表裏一体だった。分子標的治療薬は、がん細胞に特徴的な分子を標的に開発されるため副作用はぐっと低減する」(同記事)。

こう聞くと、抗癌剤の副作用の問題が解決してしまうかに思える。患者がこうした最新治療を受けたいと思うのは当然である。新聞記事の書き出しはごく最近、分子標的治療薬が登場したかのようにになっているが、実は既に肺癌治療薬「イレッサ」が使われている。

「イレッサは、世界に先駆けて日本の厚生労働省が最初に承認しました。薬品の認可に時間をかけすぎているという批判を受けて、いち早くスピード認可をしたのです。」(『免疫革命』)。ところが「効き目も抜群だったが、副作用で亡くなる患者も相次いだ」(同記事)。そしてその後、個々の患者にイレッサが効くかを検査するキットが開発されて、「オーダーメイド医療の先駆けとなった」と同記事には書かれている。

これで問題なくなったということだろうか。副作用による急激な死という問題がなくなり、癌の縮小という点において、効果が抜群だったとしても、2002年7月に発売されたということだから、延命効果が確認されていないことは明らかで、「オーダーメイド医療の先駆けとなった」と言い切ることはまだできないはずである。

「万が一、まったく副作用がなくガンの部分だけとりのぞくことができたとしても、発ガンを促した交感神経緊張状態を、生活全体を視野に入れて改善しなければ、また発ガンする危険性が大いに」(『免疫革命』)ある。要するに、局所 (部分) だけ見て、全体を見ていない。

こうした事は、実は癌だけの話ではない。例えば子宮筋腫ができる、手術で取り除くということが行われている。確かにその子宮筋腫は無くなるわけだが、そうした子宮筋腫を生み出した身体の異常が無くなったわけではない。子宮筋腫による症状は無くなったとしても、手術で傷つけられた上に、本来の原因である身体の異常は依然とからだにあって、様々な症状を引

き起こす。

私たちの治療では、もともと下腹の循環が悪く血毒が生じて子宮筋腫となったものだから、下腹の循環を良くする。その結果、下腹の循環が良くなれば、自己治癒力が働いて、多くの場合、黒いドロツとした生理出血があり、筋腫は縮小する。これが本当の治療ではないか。

喩えて言えば、こういう事である。根腐れした木には実がつかなくなったり、葉が枯れたりする。その原因を、木についた虫のせいにしたがり、枝葉の病気のせいにする。根や幹、それを養う土壌の状態を問題にしないで、害虫がどんな種類かを研究して、殺虫剤を開発したり、枝葉の病気をウイルスだカビだと探求し、薬を開発する。そういう、枝葉末節ばかりを見て根本を見ない、本末転倒の研究・治療をしているのが今の標準的な西洋医学であるわけだ。根腐れの原因である土壌の問題を解決すれば、どんな病気であるかを問わず、枝葉の病気は治り、どんな虫であろうと、多少の虫に害されない勢い盛んな枝葉が育つ。

東洋医学ではこうした事は当然の事である。私にはこうした単純な事に想い至らない、多くの西洋医学者がいることが不思議でならない。癌をはじめ慢性病は全身病である。枝葉ではなく、根本を治さなければいけないのである。

根本がマトモならば、癌など取るに足らないと安保氏は言っている。「ガン細胞はけっして生命力の強い細胞ではありません。」「ネズミに悪性のガンを発ガンさせるためには、ガン細胞を十の六乗、百万個も注射しなければなりません。一万個や十万個入れたところで、すべてリンパ球に殺されてしまいます。一方、ネズミに放射線を当ててリンパ球を減らしておくと、たった千個注射するだけで発ガンします」(『免疫革命』)。

『免疫革命』を頂いた患者からは鎌田実著の『がんばらない』『あきらめない』も頂いた。「つらい本だ」とおっしゃっていた。人事を尽して天命を待つとしても、三大療法とは違う、人事の尽し方がある。東洋医学はこれまで、「小さい内に退治しておかないと転移する」という常識の壁に阻まれて、脇役でしかなかった。主役であつてこそ、東洋医学は本当の力を発揮することができるだろう。 (2004年7月小暑)